慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト

最終成果論文（2012 年度）

高層建築に囲まれた東京の日本庭園

—俯瞰する視点からの考察は可能か—

経済学部 3 年

岡澤由季

指導教員：伊藤行雄先生

高層建築に囲まれた東京の日本庭園―俯瞰する視点からの考察は可能か―
（岡澤由季）

目次

序論 1
第一章　高層建築に囲まれた東京の日本庭園 3
　第一節　東京と京都の庭園の相違 3
　第二節　現代東京にみられる江戸時代の日本庭園 7
　第三節　再開発による庭園の復元 11
第二章　庭園都市江戸の背景 18
　第一節　制度 18
　第二節　地形を活かした日本庭園づくり 22
　第三節　社交の場としての需要 26
第三章　日本庭園を俯瞰する視点からの考察 30
　第一節　大名庭園に存在した俯瞰する視点 30
　第二節「俯瞰する視点」と「地上からの視点」 36
　第三節　現代東京の高層建築から俯瞰する視点 42
結論 52
図注一覧 54
参考文献一覧 56

（1 ページ 35 字×25 行）

高層建築に囲まれた東京の日本庭園―俯瞰する視点からの考察は可能か―
（岡澤由季）

序論

東京には多くの日本庭園が存在する。庭園として公開されているだけでなく、公園化したり、あるいは商業施設に組み込まれたりしているものもあるが、筆者は東京の日本庭園とは人々の生活に寄り添っているものだと考えている。

筆者は有栖川記念公園のそばにある幼稚園に通っていた。子どもたちからすれば、有栖川記念公園は幼稚園の園庭の延長であった。滝のまわりで水遊びをしたり、大きな池でザリガニを釣ったり、回遊式庭園の意匠は鬼ごっこやかくれんぼをするにもうってつけであった。そして避難訓練のときには防災頭きんを被って有栖川記念公園に避難した。筆者にとって、日本庭園とはかっこうの遊び場であり、安全な場所だった。しかし、小学校の修学旅行ではじめて京都の日本庭園、龍安寺の石庭を訪れたとき、日本庭園の印象は一転した。鑑賞者はあくまでも本堂の縁側から庭を眺めることしかできない。子どもたちが園内で遊ぶことは考えられないような、美が濃縮された芸術作品であった。もちろん、京都の日本庭園は、寺社仏閣の有するものが中心であり、庭が禅や極楽浄土の表象であり、宗教的な意味合いをもつものである。一方で、筆者は東京の日本庭園で人々が自由に歩き回って、自らの好きな場所を見つけられる楽しさの方が親しみやすいと感じており、京都の日本庭園にはない魅力だと考えている。

ところが、 現代の東京では高層建築が建てられ、今までの視点とは異なる角度からの新たな観賞の視点が生じることになった。つまり俯瞰する視点である。庭園が見下ろされることに対しては、庭園から観賞する側からすると甚だ迷惑

な話である。日本庭園の背景に高層建築が映り込んでしまうと、池や芝生によって表現される大名庭園特有の開放感を邪魔してしまうからだ。しかしながら、高層建築から庭園を俯瞰する新たな視点が生じたことは否定できない事実である。

東京の日本庭園に関する既存の考察は鑑賞者が日本庭園に立っていることを暗黙の前提としているものだ。高層建築が日本庭園の周りに建てられたことで、高層建築から日本庭園を俯瞰することができるようになった。この視点について議論せずに、現代の日本庭園を評価することはできないと筆者は考える。したがって、日本庭園の現在の評価に俯瞰する視点を組み込むことは、東京の日本庭園を新たに評価しなおすことにつながると考えている。

本論文において、東京の日本庭園を俯瞰する視点について取り扱うためには、第一章で現状分析を行い、第二章で日本庭園が多く造られた江戸について考察したい。そして、第三章において日本庭園を俯瞰する視点からの考察が可能であるか、検証したいと考えている。

第一章　高層建築に囲まれた東京の日本庭園

第一節　東京と京都の庭園の相違

本論文では東京の日本庭園が主題に選ばれている。

東京の日本庭園の多くは、江戸時代に大名によって造営され[1]、時代の波にもまれながらも現在までその姿を留めているものは少なくない。本論文では規模が大きい庭園、すなわち現代まで残ることの多かった大名庭園について中心に取り扱う。小野(2009)は「大名によって造営された回遊式庭園は、とくに大名庭園と呼ばれる。その特徴としては、桂離宮と同様の茶亭をめぐる構造や和漢の教養に基づいたデザインのほかに、弓場や馬場あるいは鴨場のような武芸と関連する一角が設けられることが多いこと、臨海都市である江戸の立地を活かして発案された潮入の庭の様式を取るものがあること、嗣子誕生が切実な問題であった大名家の子孫繁栄を象徴する陰陽石を置くことが多かったことなどが挙げられる」[2]と述べている。このような特徴をもつ大名庭園は鑑賞にどのような効果をもたらすのだろうか。

江戸時代の庭園、とくに大名庭園によって生み出された新しい造園的視覚は「広がり」だろう。池や芝生を素材として生かした意匠が、大名

[1] 江戸では将軍や大名だけでなく、旗本や御家人も屋敷に庭園を造っていた。さらに武家だけでなく寺社や庶民も大小の差はあるが庭園を造っていた。
[2] 小野健吉『日本庭園—空間の美の歴史』岩波新書、2009 年、p.181

庭園の「広がり」である。その効果を十分に享受するために生まれたのが回遊の行為であり、庭園様式としての回遊式はここにはじまる。

座敷にじっと座ったまま、動かずに庭園を眺めるような観賞にとっては、広がりは退屈きわまりない。だが大名庭園を回遊する中では、細い山径を抜け、うっそうと茂る森をくぐると目の前にパッと視界が開ける池や芝生は、視覚体験の大きな変化をつくり出し、回遊に驚きと楽しみを与えてくれるのである。大名庭園は、歩くことを求める。身体の動きが必要である。と同時に、また精神にも動的な刺激を与える。大名庭園の価値は、五感全体で評価されるべきものだ。[3]

白幡(1997)は、大名庭園は「広がり」という新たな造園的視覚をもたらしたと指摘している。歩き回わって五感全体で楽しむ楽しさは、大名庭園が大名の手を放れて、現代の東京に至っても変わらないものだと考える。

しかし、日本庭園といえば京都を思い浮かべる人も多いだろう。確かに観光名所として京都の社寺仏閣の庭園は有名であり、それに対して東京の日本庭園は知名度でいえば及ばない。だが、筆者は東京の日本庭園は京都の日本庭園にそれに劣らない魅力を感じているので、論文のテーマに選んだ。その理由として 2 点あげられる。1 点目としては、京都の日本庭園に比べて東京の日本庭園の評価が低いことに対して、再評価の必要性があると考えているからである。2 点目は、高層建築に囲まれた日本庭園という光景は景観規制が遅かった東京ならではの光景であり、京都では現れておらず、東京の日本庭園を再評価する視点に選びたいことがあげられる。

[3] 白幡洋三郎『大名庭園』講談社メチエ、1997 年、p.190

再評価の必要性

1 点目について、白幡(1997)は「大名庭園は京都の庭園に比べて、とくに専門家のあいだでは評価が低い」[4]と述べ、重森三玲と森蘊の 2 人の庭園研究家が江戸時代の庭園を否定的に捉えたことが原因であると指摘している。その理由として、白幡は以下のように説明している。

> とにかく日本庭園史家のあいだで大名庭園の評価は高くない。大名庭園での体験は、いかにも素人うけする。飛び石を踏んで池を渡り、築山の頂上で形式をながめまわすなど、視覚と運動のたのしみに満ちている。そんな、誰の目にも美しく、歩んでいても楽しい景観が備わっている。そこがまた玄人には不評となる。もう一つ別の理由は、大名庭園が江戸時代の庭園だからであり、またおもに江戸で生まれ発展した庭園だからである。庭の専門家の中では江戸時代の庭園全般について評価が低く、もう少し正確にいうと江戸にある庭園の評価が低いのである。[5]

ここで注目したい点は重森三玲の庭園に対する評価である。重森の編纂した『日本庭園史図鑑』全 26 巻において、江戸にある庭園はほとんど取り上げられることはなかった。重森は江戸に「多数の庭園ができたことは、従来になかったことであり、元禄を中心とする時代が特に群をぬいている。ただしかし、その多いことと逆に、この時代からの庭園が急激に悪くなった」[6]と記述している。庭園が多く造営されたことに伴って、江戸期には「築山庭造伝」のような書物が増発され、技術が画一化されていく。それに対して重森は、

---

[4] 白幡、前掲書、p.178
[5] 前掲書、p.180
[6] 重森三玲『庭　こころとかたち』社会思想社、1968 年、p.86

しかし、それは同時に、庭園の定型化でしかなかったから、庭は急激に芸術性を失っていった。したがって江戸中期以後の庭園は、ほとんどといってよいほど、本来の庭園の内容を消失してしまって、ただ単なる職人芸でしかなかったし、もはや庭園としての本質は全面的に見られなくなった。百姓や町人が、自らの世界を、ある意味においてとりもどしたのであるから、本当の民衆的な意味での芸術価の高いものが生まれるのが当然であったのに、事実は逆であった。現存する多くの江戸中末期の庭園に傑出したものが見いだせないのは残念であるが、人間的臭味の悪いものだけが残ったことになる。民衆が自分の世界をとりもどしながら、実力的には封建性が破れなかったから、悲しむべき運命となったのである。[7]

このように重森は江戸時代につくられた庭園を「単なる職人芸」や「傑出したものが見いだせない」、「人間的臭味の悪いものだけが残った」ものとして評価をしている。江戸時代につくられた日本庭園は、京都の日本庭園のような芸術性はないかもしれないが、筆者は芸術性だけが庭の評価を決めるものではないと考えている。そしてこの評価の主たる原因となった、江戸に多くの庭園が造られた理由について解明することが庭園の再評価につながると考えている。

高層建築と共存する庭園

白幡(1997)は「庭園を日常、非日常の双方でとらえ、必要に応じてどのような意匠がほどこされたのか、どのような装置としてつくりあげられ、様式ができあがっていったのか」[8]という視点で東京の日本庭園をとりあげた。筆者は白

[7] 重森、前掲書、p.86
[8] 白幡、前掲書、p.187

幡の考察から約 15 年を経て新たに生まれた高層建築と共存する日本庭園について注目したいと考えている。なぜなら高層建築に囲まれた日本庭園は景観規制が遅かった東京でしか現れていないからである。

図 1　旧芝離宮恩賜庭園

現在の東京の日本庭園に対する評価は否定的なものが多い。高層建築が現れたことで、日本庭園の景観が阻害されているといった論調である。これは鑑賞者が庭園内にいるときには妥当な言い分だと考えられる。だが視点を変えれば、高層建築から東京の日本庭園を眺める、新たな鑑賞が生まれたともいえよう。つまり、今まで見られなかった庭園を俯瞰する新しい視点からの鑑賞がうまれた。この俯瞰する視点からの考察は可能なのだろうか。東京の日本庭園を再評価する視点として、高層建築から俯瞰する視点を考察するつもりである。

第二節　現代東京にみられる江戸時代の日本庭園

現在の東京には日本庭園が多く存在する。私たちが訪れることができるものとしては、都立庭園として管理されている 9 庭園や都立庭園美術館だけではなく、有栖川記念公園や戸山公園のように公園化されたもの、椿山荘など商業施設の一角になったものがある。そのほかにも非公開であるが、大使館の庭として残ったものもある。

それらのほとんどが江戸時代から引き継がれる庭園である。江戸は庭園都市と呼ばれるほど多くの庭園が存在した理由は第二章で後述したい。

この節においては江戸期に造られた庭園が現在まで残されていることに注目する。それは何故なのだろうか。

図 2　小石川後楽園

維持される大名屋敷の敷地割

その理由としては、江戸時代から現代の東京へ至るまで、敷地割の大きな変化が起こらなかったことがあげられる。「明暦の大火後どの大名も中屋敷、下屋敷をもつようになると、山の手の条件のよい場所は次々と大名屋敷によって占められていった」[9]と指摘されるように、江戸期には山の手の高台には大名屋敷街が形成されて、その屋敷の敷地には大名庭園が造営された。

> 東京では、こういった数多い大名屋敷の跡地が、それぞれの<敷地>単位を崩すことなく、その内部で完結する方法で開発され、それらがモザイク的に集合して全体の都市組織を織り成すというソフトな変容の形をとった。ヨーロッパ都市のように全体を再構成するような大改造は行われなかった。こうして東京の近代は、部分ごとには歴史の記憶を集積し

[9] 陣内秀信『東京の空間人類学』ちくま学芸文庫、1992 年、p.45

> 変化に富んでいるが、逆に全体としては論理的構造に一見欠けたようにみえる、独特の都市を形づくることになったのである。したがって、西欧の近代都市を尺度として判断しては､近代の東京の特徴もその魅力も、的確に捉えられないことはいうまでもない。[10]

したがって、大名屋敷の敷地は細かく分けられる事例は珍しく、大きな敷地割のまま転用されることが多かったといえよう。大名屋敷は明治維新以降、2回大きな転機を迎えたと言われている。具体的には、

> まず明治維新とともに、大名屋敷の多くは上地された後、敷地規模を変えず公共施設に転じたり、京都から移った公卿出身の華族や新政府の重臣の屋敷となった。また華族となった旧大名の屋敷としてそのまま受け継がれたものも山の手には少なくない。二度目は第二次大戦後で、軍事施設や邸宅の多くがその他の公共施設やホテル、住宅地へと移り変わった。[11]

(ウェブ公開に伴い削除)

図 3　明治以降の大名屋敷変遷図

このように、大名屋敷は明治維新とともに新たな持ち主の手に渡っていった。一方で、明治時代は多くの庭園が失われた時代でもあった。川添(1979)によれば､「大政奉還にあたって、大名たちは、自分たちが住むための上屋敷だけ残して、他の屋敷を奉還した。それをうけとった明治政府も、その処置に困り、もてあましたあげく、たいていは二足三文で払い

[10] 陣内、前掲書、p.66
[11] 前掲書、p.61

さげ、その庭園のほとんどが、破壊されてしまったのである。そしてまた、一市民に転落した大名たちの多くは、上屋敷ですら維持することが困難になっていた」[12]という。さらに、第二次世界大戦後には庭園は破壊されるものも多々あったが、公共施設やホテル、住宅地へ変わっていくなかで維持されるものもあった。

2000 年代に入ると、大名屋敷跡の広大な敷地を活用して、大規模な再開発が行われるようになったことは周知のとおりである。大名屋敷街で大規模な再開発が行われるようになると、再開発で新しく造られた高層建築群と日本庭園が隣接する状況がみられるようになったことをここで指摘しておきたい。

汐留再開発と浜離宮恩賜庭園

それでは、その例として「平成 14 年に“街開き”を迎え」[13]た汐留再開発を取り上げたい。汐留地区とは、「東京都心の南部に位置し、ＪＲ新橋駅に近接する旧国鉄汐留貨物駅跡地からＪＲ浜松町駅付近まで広がる施行面積約 30.7ha の地区である。地区内には鉄道発祥の地として名高い旧新橋停車場跡があり、地区の東側には広大な浜離宮庭園が隣接するなど、都心にあって歴史的景観と自然が残る数少ない地域の一つである」[14]が、この地は江戸時代、大名屋敷街であった。

その隣に位置するのが、浜離宮恩賜庭園[15]である。

---

[12] 川添登『東京の原風景』日本放送出版協会、1979 年、p.119

[13] 汐留シオサイト、“街づくりについて”、（オンライン）、入手先 http://www.sio-site.or.jp/about/about1.html（閲覧日:2013/01/13）

[14] 東京都第二区画整備事務所、“汐留地区　2.地区の状況”、（オンライン）、入手先 http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/dainikukaku/chiku/shiodome.html（閲覧日:2013/01/13）

[15] 浜離宮恩賜庭園は将軍家の別邸だったイメージがあるかもしれないが、ここに初めて屋敷を建てたのは、四代将軍家綱の弟、甲斐藩主松平綱重であり、本来は大名屋敷だったといえる。1654 年、綱重は将軍から海を埋め立てて甲府浜屋敷と呼ばれる別邸を建てる許しを得た。その後、綱重の子供の綱豊(家宣)が六代将軍になったのを契機に、この屋敷は将軍家の別邸となり、名称も浜御殿と改まったという。(公園へ行こう HP、“浜離宮恩賜庭園概要”、(オンライン)、入手先 http://www.tokyo-park.or.jp/park/format/outline028.html（閲覧日:2013/01/13）

江戸初期(1650[16]年代)、浜辺を埋め立て造成した敷地である。四代将軍家綱の弟、甲府宰相松平綱重の「浜御殿」がこれである。綱重の子綱豊が六代将軍家宣となったので、これ以後将軍の別邸「浜御殿」「浜の庭園」「浜の御庭」として約 200 年歩む。明治 3 年(1870)からは明治政府、宮内省所管の「浜離宮」、昭和 20 年(1945)からは下賜を受け「東京都立浜離宮恩賜庭園」となって今日にいたっている。[17]

浜離宮恩賜庭園は江戸期からその地に存在していたが、周りが再開発されたことによって、結果的に高層建築に囲まれてしまうことになった。このような大規模な再開発ではないが、三田の綱島三井倶楽部でも同様の事態が起こっている。陣内(1992)は「三井倶楽部の敷地のすぐ南に接して、このすばらしい庭を借景として見降ろす高層の高級マンションが建っているというのも、現代の東京らしい風景である」[18]と指摘している。大名庭園は江戸時代から変わらず残されたとしても、その周りの建物は時代とともに移り変わっていく。その結果、高層建築から日本庭園を俯瞰する視点がうまれたのである。

第三節　再開発による庭園の復元

東京には江戸から残された日本庭園がある一方で、再開発計画に伴って日本庭園が復元されている事例も 2 つみられる。ともに六本木で、六本木ヒルズと東京ミッドタウンである。

[16] 引用文献中の漢数字はアラビア数字に改めている。以降の文献の漢数字も同様にアラビア数字に直している。
[17] 進士五十八『日本の庭園』中公新書、2005 年、p.163
[18] 陣内、前掲書、p.60

六本木ヒルズの毛利庭園

この地は毛利甲斐守の上屋敷であったが、昭和 27 年 3 月にニッカウヰスキーの東京工場となると、庭園は池に面影をとどめるのみとなっていた。昭和 52 年にテレビ朝日がこの地を取得し、平成 15 年開業の六本木ヒルズの再開発にあわせて毛利庭園は復元された。[19]しかしこの庭園は「六本木六丁目の再開発にあたって、新たに緑地「毛利庭園」を整備することになりました。 将来のさらなる発掘調査などの可能性を残すため、ニッカ池の池底を固めるとともに周辺の地盤改良を行い、防護シートで覆い、埋土保存を行」[20]なったものであり、昔の大名庭園をそのまま復元したものではなく、新たな「毛利庭園」のコピーができたことになる。ただし、「もともとこの地にあった桜や楠、榎、銀杏などの古木はそのまま残され、さらに庭園内にあった石材の一部も再利用して、昔の姿をできるだけ忠実に再現しようとした」[21]といい、過去の庭園のエッセンスは残されたものである。

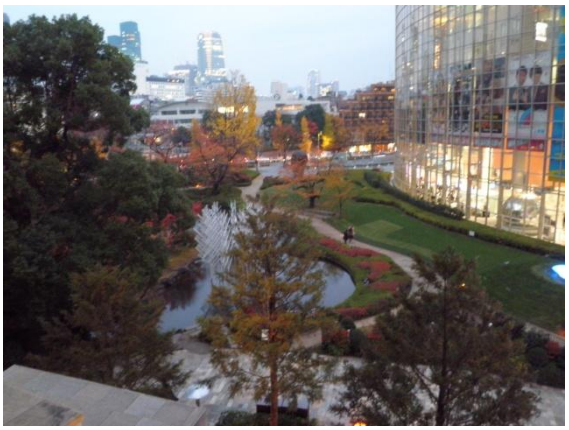

図 4　毛利庭園

フィールドワークを行ってわかったことは、高層建築の谷間に日本庭園が造られており、人々は高層階からも低層階からも日本庭園を俯瞰することができ

[19] 六本木ヒルズ HP、“六本木ヒルズの緑　庭園の歴史年表”、（オンライン）、入手先 http://www.roppongihills.com/green/mohri/history.html（閲覧日:2013/01/01）
[20] 六本木ヒルズ HP、“六本木ヒルズの緑　生まれ変わる毛利庭園”、（オンライン）、入手先 http://www.roppongihills.com/green/mohri/renew.html（閲覧日:2013/01/01）
[21] 青山誠『江戸屋敷三〇〇藩　いまむかし』実業之日本社、2008 年、pp.82-83

るということである。池や滝が造られて、日本庭園の要素がその空間のなかで再現されている。六本木ヒルズの敷地内に造られてはいるものの、塀はなく人々が自由に出入りできる場所である。さらにイベントスペースが隣接しているので、静かに庭園を楽しむのは難しいといえる。あくまでも近代的な高層ビル群に緑のアクセントを与える存在である。

東京ミッドタウンの檜町公園

東京ミッドタウンに隣接する区立檜町公園は、萩藩毛利家の麻布下屋敷の庭園だったものであり、屋敷が取りつぶされたあと公園として活用されていたが、再開発に伴い日本庭園に整備し直したものである。[22]「公園内には池の傍らに和風の休憩所が設置されるなど、ここにかつて毛利家の下屋敷があったことを思い起こさせるデザインが随所に見られる」[23]といい、六本木ヒルズの毛利庭園と同様にあくまでも大名庭園風の造りになっている。

図 5　檜町公園

フィールドワークを行った成果としては、檜町公園の前には東京ミッドタウンレジデンシィズ（居住棟）が建っているので、一般客は檜町公園を俯瞰する

[22] 東京ミッドタウン HP、“グリーン＆パーク”、（オンライン）、入手先 http://www.tokyo-midtown.com/jp/facilities-service/green/index.html（閲覧:2012/12/30）
[23] 港区立港郷土資料館「東京ミッドタウン前史　赤坂檜町三万年」港区立港郷土資料館発行、2008 年、p.86

のは難しいことがわかった。しかし、「現在の檜町公園は、東京ミッドタウンの敷地内に含まれる、ミッドタウン・ガーデンと一体となり、オフィスや住宅街の憩いの場を形成している」[24]と紹介されているように、和風の休憩所だけでなく、庭園の各所にベンチが配置されており、地上においては人々が自由に時間を過ごせる場所である。

ここで、この檜町公園と東京ミッドタウンとの敷地境界に注目したい。図 6 のように芝生の中央に敷地境界があり、ミッドタウンと檜町公園の境界は曖昧である。檜町公園は日本庭園のスタイルをとっているが、塀に囲まれておらず、誰でも出入り自由である。なぜなら檜町公園はミッドタウンの敷地ではなく、再開発に伴って整備し直された港区立公園であり、オープンスペースだからである。[25]

図 6　檜町公園と東京ミッドタウンの敷地境界

どのような意図のもとで、東京ミッドタウンはランドスケープに日本庭園を取り入れたのだろうか。

[24] 港区立港郷土資料館、前掲書、p.86
[25] 東京ミッドタウンと檜町公園の境界をなくすために、港区立檜町公園を 4m かさ上げし、防衛庁跡地側を 4m 切り下げした。(三井不動産株式会社『東京ミッドタウン』新建築社、2007 年、p.118)

東京ミッドタウンの"On the green"というコンセプトを具現化するにあたり、デザインには日本古来の智慧である「日本庭園」の概念が取り入れられています。それは、ただ形を模倣するのではなく、自然と共生する日本の伝統的なスタイルの表現であり、様々な文化的要素が交わる高度なコラボレーションの場としての「庭園」でもあるのです。
ランドスケープデザインを担当したのはサンフランシスコの EDAW です。開発の波にさらされず手付かずに残っていた東京都心の約 10ha もの土地を日本的に表現することが求められました。周囲から気軽に入っていける開かれたランドスケープ、水の流れを使って高低差の大きな土地で空間の流れを表すゾーニングといった連続性を意識したアイディアを導入しました。日本庭園における土と岩、池、植栽などの関係性から、舗装と土、空間と植栽などの境界は、直線的ではなく曖昧に仕立てられています。[26]

"On the green"というコンセプトの発露として、日本庭園が選ばれた。この背景には大名屋敷の跡地だったことを利用しようという発想があったと推測できる。また、境界を曖昧に仕立てようとしたデザイナーの意図によって、東京ミッドタウンのランドスケープデザインはプライベートとパブリックの境界が曖昧になっているのが特徴といえよう。したがって、「庭園」という本来なら閉じられたプライベートスペースが、東京ミッドタウンでは「公園」としてパブリックスペースとして生まれた。

[26] 東京ミッドタウン HP、前掲 URL

復元される庭園

この二つの庭園をフィールドワークした結果、この二つの日本庭園に共通して言えるのは歴史が浅いことが鑑賞者にわかってしまう点である。もちろん、復元するもととなった庭園があり、その場所には古くからの歴史があったといえよう。しかしその池や植栽自体は新しく造られたものである。

このように日本庭園が再開発に伴って復元されるのはなぜか。これは六本木の二つの日本庭園だけではなく、汐留の再開発では旧新橋停車場が復元されたり、東京丸の内では東京駅駅舎が復元された流れとも共通している。つまり、主眼は都市の記憶を遺すことにある。

隈健吾(2008)は六本木ヒルズについて「超高層に容積を集約することで、周囲の住宅的環境に接する部分は、可能な限り低層に抑えて、その低層部には庭園や緑地を作った。そうすることで、大規模再開発に正当性を与えたわけですが、その社会的なアリバイ作りが都市にとってはプラスに作用する」[27]と評している。再開発して高層ビルを建てることは計画自体が近隣住民から反対されることもある一方で、景観が損なわれるとして批判されることもある。それらの批判をかわすための「アリバイ作り」として、その場所にゆかりのある遺構を復元すると考えられる。再開発がその地の歴史を尊重しているというアピールになるのである。特に日本庭園を復元することは緑を取り込むことができるので、よりいっそう「アリバイ作り」に利用されやすいのではないか。

章括

現在の東京で高層建築から日本庭園を俯瞰できる状況が生まれたのは、2 つの経緯があったといえよう。1 点目は江戸から残された大名庭園のまわりが開

[27] 隈研吾・清野由美『新・都市論 TOKYO』集英社、2008 年、p.107

発されていった結果、このような状況が生まれた。一方で、再開発に伴って日本庭園が復元されることもあったという点である。

第二章　庭園都市江戸の背景

東京の日本庭園を俯瞰する視点が生まれた経緯を第一章で述べたが、もともと「庭園都市江戸」と呼ばれるほど江戸には庭園が多く、それが現代まで引き継がれている。このような状況をつくりあげたものは何だったのだろうか。それを解明するためには、庭園都市江戸の歴史を紐解く必要がある。筆者は庭園都市江戸の背景として、「制度」「地形」「社交の場としての需要」の 3 点を指摘したい。

第一節　制度

江戸が庭園都市となった契機として、幕府の定めた制度を指摘しておきたい。江戸にも京都から庭園文化は伝わっていたと考えられるが、それが江戸の地に根付くための環境が必要だった。この節では参勤交代と明暦の大火後の政策を取り上げることとする。

参勤交代

大名が屋敷内に庭園を造営する直接的な要因ではないが、参勤交代が大名屋敷を設ける前提になったことを指摘しておきたい。「江戸時代の初期から大名たちは江戸城近郊に土地を拝領して屋敷を建てていた」[28]ので、大名屋敷は形成されていたのだが、「3 代将軍家光の時代になると、幕府の権力は強まり、参勤

[28] 青山、前掲書、p.56

交代も制度化されるようになる。大名たちは国元と江戸での二重生活を強いられるようになり、また、藩主が江戸で暮らしている間は、藩の機能が江戸にも必要となった。このため大勢の藩士が江戸に住むことになる。ひとつの屋敷だけではどうしても手狭になり、このため用途に合わせていくつかの屋敷を建てるようになった」[29]という。参勤交代が本格化されることで、江戸に大名屋敷が構えられ、そのなかに庭園が造営されていった。

江戸に住むことになった大名は、自らの庭園に中国趣味や和歌の世界を実現しようとした。江戸の地であっても、屋敷のなかだけは自分の趣味の赴くまま、自らの世界をつくりあげることができたのではないだろうか。[30]小石川後楽園を造った水戸藩主徳川光圀のように、領地の様子を庭園の造形に取り込んだケースもみられる。小野(2009)によれば「庭園の一角に水田や松原なども配しているが、これは領民の勤労を思い、領国をしのぶ封建領主としての立場の表現といえよう」[31]。現在の小石川後楽園においても水田が残され、稲が栽培されていた。

図 7　小石川後楽園の稲田

[29] 青山、前掲書、p.56
[30] 川添(1979)によれば、大名屋敷内には「幕府の警察権・裁判権もおよばず、それぞれが領国であり、いわば租界であった」（前掲書、p.166）という。大名屋敷は現在の大使館に類似した存在だったと考えられる。
[31] 小野、前掲書、p.183

明暦の大火後の政策

白幡(1997)は、「大名庭園と呼びうる独特の造園様式の成立は、やはり明暦の大火(1657)以後に生まれたものといわねばならない」[32]と指摘する。明暦の大火は、江戸城を大半焼失させたもので、その被害は大名屋敷が 160 家、旗本屋敷が 770 家、町屋が 400 町焼失し、死者は数万から 10 万人とされた。[33]

> 幕府は政権の安定を図る上からも、江戸に住まう大名たちの屋敷の保護策をうちださねばならなかった。その大事な政策の一つが、火災からの危険を分散させる、複数の屋敷を持たせる政策だった。本邸のほかに屋敷地を与えることによって大名たちが、罹災した場合の緊急避難地を確保できるように図ったのである。明暦の大火は、上・中・下屋敷を一種の制度化する契機となった。
>
> こうして各大名が所有するようになった上・中・下屋敷には、大小さまざまな庭園が設けられた。とくに下屋敷には、練兵や園遊のために広大な庭園が設けられることが多かった。そして幕府の体制が安定化するにつれ、各藩の庭園整備は進み、多数の名高い庭園が誕生した、江戸には数百の藩が、それぞれ藩邸を構えていたわけだから、上・中・下の屋敷に、それぞれ庭園の設けがあったと考えると、大小さまざまの千にものぼる数の庭園が江戸にはひしめいていたことになる。[34]

江戸では火事が多かったものの、過去に例を見ないほどの被害が出た明暦の大火を経験し、幕府は火災のリスク分散政策として大名に上・中・下屋敷をも

---

[32] 白幡、前掲書、p.22
[33] 飛田範夫『江戸の庭園』京都大学出版会、2009 年、p.234
[34] 白幡、前掲書、p.34

たせる政策を打ち出さざるをえなかった。[35]これが庭園都市江戸をつくりあげる直接的な契機になったと考えられる。しかし、各大名はこの三屋敷しか持っていなかったわけではない。

江戸時代には、俗に三百諸侯といわれるように約 300 の大名がいたとされるが、明治維新のとき存在していたのは、271 であった。その分限に応じて、敷地に大小があったとはいうものの、いずれも上屋敷・中屋敷・下屋敷を、幕府から拝領し、大大名になると 5,6 カ所、小大名でも 3,4 カ所があたえられていた。そのうえ、みずから土地を買いあげた抱屋敷をもっていたのである。[36]

(ウェブ公開に伴い削除)

屋敷ごとに庭園の大きさは異なる。図 8 の大名屋敷分布図によれば、上・中屋敷は江戸城の近くに位置し、下屋敷は江戸の郊外に位置し、広大な敷地をもっていた。「このうち上屋敷には、家臣たちを住まわせる家が建てられていたから、いきおい庭が狭くなり、庭は前栽程度のものが多かった」[37]が、「中屋敷・下屋敷・抱屋敷となると、そのほとんどが庭園で占められていたと考えていい。だから、どんなに少なく見積もっても、江戸には、大名によってつくられた、1000 を超える数の、林泉

図 8　大名屋敷分布図

[35] このほかにも、幕府は防火対策として密集地をなくすために武家屋敷・寺社を移動させたほか、赤坂溜池（港区）の一部埋め立てや築地（中央区）・本所（墨田区）・深川（江東区）を造成して市域拡大を図り、立て込んだ町割を改めるために道路の拡張を行い、延焼を防ぐために広小路・防火堤・火除地などの防火地帯を設けた。（飛田、前掲書、p.234）明暦の大火後の政策は、現在の東京の基礎を造ったと考えられる。
[36] 川添、前掲書、p.98
[37] 前掲書、p.98

を構えた庭園があったであろう」[38]。したがって、中屋敷・下屋敷・抱屋敷には広大な庭園が設けられ[39]、庭園都市とよばれるにふさわしい様相を呈していたと考えられる。

庭園文化の集積地江戸

前述したように、江戸に多くの大名庭園が造られ、庭園技術の膨大な需要を創出した。「江戸前期には大名屋敷の庭園造営が盛んに行われていることから、植木屋は業種として独立したものになり、江戸城内の植栽工事にも関わるようになった」[40]という。さらに川添(1979)は「大名屋敷は、植木・花卉栽培の最大のパトロンであった」[41]と指摘しており、江戸時代花卉の栽培技術が進歩した。このように、大名屋敷が江戸に集まることで、庭園文化はますます発展を遂げることになったのである。

第二節　地形を活かした日本庭園づくり

住み分けが進む江戸

皆川(2012)は、東京の町と地形の関係性や法則性の基礎は江戸時代にあると指摘する。具体的には「身分・階級による住み分けが行われていた江戸時代、山の手台地（洪積台地）は武士の生活空間（武家地）で、下町低地（沖積平野）

[38] 川添、前掲書、p.99
[39] しかし、飛田(2009)によれば「中屋敷は隠居した藩主や嗣子、上屋敷に収容しきれなかった藩士などが居住した場所だった。政務のための表御殿や居住のための奥御殿などの殿舎群があり、小規模な庭園や厩・馬場が付属していた。こうした建物が面積を占めていたために、中屋敷には名園は少なかった」（前掲書、p.88）という。あくまで広大な大名庭園は下屋敷と抱屋敷を中心に見られたのだと考えられる。抱屋敷とは、大名が自ら買い上げた土地に建てられた屋敷であり、食料の供給場所として田畑が造られることが多かった。
[40] 飛田、前掲書、p.6
[41] 川添、前掲書、p.168

は商人や職人の生活空間（町人地）だった」[42]ことを意味する。そして図 9 のように、この住み分けは現代まで維持されている。

(ウェブ公開に伴い削除)

図 9　江戸から現代への変遷説明図

大名屋敷は台地の上で日当たりのよい場所に位置したことが理解できる。しかし、高台に造られた日本庭園は数少なく、代表例は小石川後楽園にとどまる。なぜなら、「高台は水害の被害をまぬがれたが、園地に利用する水は得にくいために、水道として敷設された上水に頼るしかなかった」[43]からである。水不足を解消するために、小石川後楽園では「上水を汲み上げて、音羽滝に流し落とすだけでなく、木樋で水を送って中島にも滝をつくるという高度な工夫もされている」[44]。このような高度な工夫に頼らなくてはならなかったので、水不足が起こる可能性がある場所ではなかなか高台に日本庭園を造ることは難しかった。

スリバチを取り込んだ庭園

水が枯れてしまえば、庭園の大泉水を維持するのは困難である。大名屋敷の立地は泉水に利用する水を左右することになる。

[42] 皆川典久『東京「スリバチ」散歩』洋泉社、2012 年、p.36　ただし、江戸周辺地特に現在の官庁街の一部の大名屋敷は低地にあり、また人口の増加とともに低地にも大名屋敷が造られてくる。
[43] 飛田、前掲書、p.141
[44] 前掲書、p.141

まず多くの場合、大名屋敷は高台の尾根道に面して立地する。そこでは敷地内の斜面となるところに、高低差による湧水を生かして池をつくり、回遊式の庭園を設けることができるのである。しかも、できるかぎりの尾根道の南側に立地し、敷地内の北寄りに位置する高台平坦部に建物を置いて、その南の斜面に庭園をつくろうとする傾向が読みとれる。「君主は南面する」という思想、陽光に向かって建物を開きたいという願望がそこには見られ、古来培われてきた日本人の住いに対する志向性が明確に現れていると思った。[45]

水不足の解決方法として、斜面を取り込んで大名庭園を造ることで、高低差によってうまれる湧水を頼ったのである。これは日本人の住いに対する志向性とも合致するもので、多くの大名庭園はこの形で生まれた。大名屋敷の高台から南の斜面に造られた回遊式庭園を眺めることができるようになっていたと考えられる。このような斜面に造られた庭園はスリバチ状の地形を取り込んだものといえる。皆川(2012)はスリバチ状の地形をとりこんだ大名庭園は現在公園になっているものが多いので、「公園系スリバチ」[46]と呼んでいる。公園として公開されている例として、有栖川公園や清水谷公園、新宿御苑があげられる。[47]

図 10　有栖川宮記念公園の滝

[45] 陣内、前掲書、p.46
[46] 皆川、前掲書、p.38
[47] 公園以外の施設で活かされている例は国立科学博物館附属自然教育園(旧高松藩松平家下屋敷)、フォーシーズンズホテル椿山荘東京(旧黒田家下屋敷)など。また公開されていないものとして、綱町三井倶楽部(旧日向佐土原藩島津家上屋敷)、大使館の庭園などがあげられる。

潮入りの庭

山の手に造られた大名屋敷も多かった一方で、海岸近くに設けられる屋敷もあった。内陸の京都と異なり、江戸では海が近い地理を活かした日本庭園もみられる。それが潮入りの庭とよばれる庭園である。その例として現存するのは、浜離宮恩賜庭園と芝離宮恩賜庭園[48]である。「園池の水に海水を使うしかないということは、塩気があるために淡水に住むコイを飼えず、カキツバタのような水草を植えることができないので、条件としては最悪だった。ところが、海水の持つ性質を逆に生かして、海水の満ち引きによる庭園の風景の変化を楽しむという、それまで誰も考えなかった『潮入りの庭』が創り出された」[49]。

江戸期以前の日本庭園は泉水を設けるためには淡水をひく必要があった。しかし、海岸に近い立地を活かすことで、淡水をひく手間を省くだけでなく、潮の満ち引きによる風景の変化を庭園内に持ちこむことができた。その装置として、旧芝離宮恩賜庭園には脚の長い雪見灯籠がみられる。灯籠の脚が長いのは、潮が満ちてきても、灯籠が水中に沈まないようにしたからである。

図 11　旧芝離宮恩賜庭園の雪見灯籠

[48] しかし、現在旧芝離宮恩賜庭園の池は海側が埋め立てられてしまい、潮入りの庭ではなくなった。現存する潮入りの庭は浜離宮恩賜庭園に限られる。
[49] 飛田、前掲書、p.107

この潮入りの庭は海に面した屋敷だけでなく、海水がさかのぼってくる河川に接していた屋敷の庭園でもみられたという。[50]

> 潮入りの庭は全く江戸の発明といってよい。そしてこの形式こそ庭園をもっぱら視覚から観賞する姿勢を生み出す母体となった造園様式だと思われる。芝離宮の景観を見ていると、じつに視覚の回遊を求めている庭園ではないかと思えてくるのである。[51]

白幡(1997)が指摘するように、潮入りの庭はその景観を潮の満ち引きによって変化させるものであり、視覚に訴える庭である。江戸で多くの庭園が造られたのは、京都とは異なる環境であったとしてもそれに適応できる「発明」がうまれ、江戸ならではの特徴を活かすことができたからだと考えられる。

第三節　社交の場としての需要

前述したように、制度や地形を活かして日本庭園が造られたとしても、千を超える日本庭園が江戸に造られたのはなぜだったのだろうか。筆者は江戸において庭園は観賞されるものにとどまらず、社交の場としての需要に応えることができる存在だったからだと考える。

御成の舞台

大名庭園は将軍を接待する「御成」の場として活用された。「御成」は、「幕府の公式行事として実施したのが二代将軍秀忠」[52]であり、「将軍が公式に臣下

[50] 飛田、前掲書、p.92-96,101-103　現存しないが、隅田川沿いの蓬莱園（平戸藩主松浦隆信の屋敷）や深川付近の屋敷では河川を利用した潮入りの庭が造られていた。
[51] 白幡、前掲書、p.210
[52] 飛田、前掲書、p.229

の屋敷を訪問する儀式をいい、大名や幕臣にとって、極めて重要な儀式であった」[53]。初期の御成では「御成用の御殿や数寄屋とともに、政治的な密談を含む儀礼や社交の重要な舞台装置として、茶事を行える庭園が、武家・大名には必要になっていく」[54]。

このように御成が重要視されたのは、「招待する方の大名は将軍の機嫌を損ねたら領地没収となりかねないので、対応に細心の注意を払わねばならなかった。大名としては不名誉にならないように、立派な建物・庭園を用意する必要があった。そのために大名たちは競って屋敷を豪華なものにし、広大で優美な庭園を造営していくことになった」[55]からである。江戸において大名庭園の数多く造られた目的とは、将軍をもてなすことだったと考えられる。特に江戸初期には茶事を行う場所だった。[56]

しかし 11 代将軍家斉のときに御成は大きく意味合いを変えていくこととなる。「寛政 9 年の春、11 代将軍家斉が『高田』へ狩りに出てその途中、尾張藩の下屋敷戸山荘を訪れている。正式な御成りではないが、こんな形式での将軍の訪問があり、大名庭園も略式訪問の将軍を迎えるため、平常とは異なる趣向が施された。この時は、にぎやかで盛大なもてなしを避け、あたかも村里に将軍が足を踏み入れたかのような雰囲気づくりが整えられていた」[57]という。このように茶事の色合いは江戸初期と比べると薄れ、その代わりに鷹狩と結びついていく。白幡(1997)は以下のように考察している。

> 家斉の場合は、さらに長期安定をつづける幕藩体制の下で、臣下たる大名の屋敷を、鷹狩行事とからめて、訪問する略式の御成をつくりあげ

[53] 徳川美術館『江戸のワンダーランド大名庭園』徳川美術館、2004 年、p.57
[54] 白幡、前掲書、p.27
[55] 飛田、前掲書、pp.230-231
[56] 江戸初期の大名屋敷には屋敷に茶室・茶庭が設けられるのが当然のことだった。この背景には京都の茶事を中心とする宮廷文化の影響があったと考えられる。（白幡、前掲書、p.27-28）
[57] 白幡、前掲書、p.139

た。それは、幕府初期の 17 世紀のあいだにできあがった御成が刺激した大名屋敷の整備と、家康が始め、吉宗が再興した鷹狩による郊外の御殿茶屋の造成との合体であったとみることができる。幕府の支配・統治の手法をみてゆく中から大名庭園の歴史を考えると、鷹狩と御成によって開発された装置が、重要な役割を演じていることに気づく。大名庭園が武家の儀礼と社交という統治上必要な機能を担っていることがはっきりしてくる。[58]

しかし、大名にとって御成は大きな負担を伴うものであり、ぜいたくな消費が行われていたことは考古学からも明らかになっている。[59]このようなぜいたくを尽くした御成は、大名が将軍をもてなした定量的な証拠であり、幕府の支配・統治の手法の一つだったといえよう。そして大名庭園が御成で大きな役割を担っていたことは明らかだった。

臣下、近隣住民との交流の場

一方で、大名庭園は将軍をもてなすだけの場所ではなく、臣下をねぎらう場所でもあった。後楽園では徳川光圀が『大日本史』の編纂に関わった臣下を招いて酒宴を開いていた。[60]記録に残らずとも、大名たちは大名庭園で臣下をねぎらうことがあったと考えられる。藩主が共通の趣味をもつ家臣や家中の子供たちとも大名庭園を公開する形でも臣下との交流が行われたという。[61]

---

[58] 白幡、前掲書、pp.154-155

[59] 大聖寺藩の大名屋敷跡（現在の東京大学附属病院）を発掘した際には、池の跡から白木の箸、折敷、「かわらけ」が大量に出土した。これらの組み合わせは儀礼的な性格の強い饗宴を思い起こさせるものであり、饗宴の後始末に関係して、一時に一括廃棄されたものだと考えられる。（藤本強『埋もれた江戸』平凡社、1990 年、pp.126-135）

[60] 白幡、前掲書、pp.137-139

[61] 趣味を同じくする藩主と家臣が、同好会のような催しを、大名庭園を会場として行なうことや、和歌山藩邸の「西園」（現在の迎賓館）で藩主が江戸詰の年には藩主が子供たちに向かってミカン投げや菓子、餅撒きなどをする「御投げもの」と称するイベントが行われていたという。（白幡、前掲書、pp.173-175）

臣下を問わず、近隣住民にとっても大名庭園は大名との接点となった。大名庭園の広大な敷地には在地の稲荷や寺が含まれることが多かったため、大名が近隣住民に参拝を許可したときには、大名庭園が庶民にも公開されることもあったからである。[62]

白幡(1997)は「大名庭園は饗宴など楽しみと儀礼をともなう武家どうしの社交の装置であると同時に、もっと広い範囲に及ぶ主従、支配被支配のなかの緩衝用装置としての性格をもっていた。武家が社交を、より多様に展開してゆけばゆくほど、庶民に向かってもそんな機能を提供せざるを得なかった」[63]と指摘している。

大名庭園は本来将軍をもてなす社交の場としての需要に応えるために生まれてきたものである。しかし江戸の地に多くの大名庭園がうまれてきたのは、それだけの役割だけでなく、臣下や近隣住民との交流の場としても必要不可欠な装置だったからではないだろうか。そのために大名庭園はただ観賞する庭園ではなく、人々をもたらすために趣向をこらされていったと考えられる。

[62] 萩藩麻布下屋敷（現在の東京ミッドタウン）の庭園内には清水稲荷があり、例年 2 月初午の日には広く一般町人まで庭園が開放されていた。（港区立港郷土資料館、前掲書、pp.104-105）
[63] 白幡、前掲書、p.176

第三章　日本庭園を俯瞰する視点からの考察

第一章での現状分析、さらに第二章での江戸時代の庭園史をふまえて、「高層建築から日本庭園を俯瞰する視点」について考察していきたい。

第一節　大名庭園に存在した俯瞰する視点

庭園を俯瞰する視点は、大名庭園がつくられた当時から存在したのだろうか。

> 幕末の江戸を、もし上空から眺めることができたなら、大小さまざまな庭園が、人家の群れとモザイック状に組み合わさった都市として、眺められただろう。なぜなら、江戸の面積の 6 割を占めていた武家屋敷の多くには、庭園が営まれていたからである。[64]

飛行機や高層ビルのない江戸時代には、このように江戸全体を上空から見渡すことはできなかった。しかし、江戸期には庭園の内部において、俯瞰するための装置があったことを指摘しておきたい。

高低差を活かした大名屋敷

まず、大名屋敷と庭園の位置関係に着目したい。第二章第二節で述べたたように、多くの大名屋敷は日当たりのよい高台に位置した。庭園が谷地形を取り

[64] 川添、前掲書、p.98

込んでつくられたものの場合、屋敷から庭園を俯瞰することができた。現在有栖川宮記念公園である陸奥盛岡藩下屋敷がその例としてあげられる。現在では都立中央図書館のあるところから庭園を臨むことができる。さらにはこの庭園では、斜面を利用して広尾駅のほうへ下っていくと、庭園の中心にある泉水と屋敷ある高台の高低差を体感でき、斜面につくられた道が庭を回遊するように鑑賞者を誘導している。斜面を取り込んで庭園を造営することによって、庭園内に滝が造られるという副次的な効果ももたらされた。

露台考

このように高低差を取り込んだ庭園だけでなく、平地につくられた大名庭園であっても庭園を俯瞰するための装置が存在した。それが白幡(1997)の指摘する露台である。浴恩園[65]全図(図 12)を見ると、

> 広場の岸辺に「露台」と記された四角の台が組まれている。門の脇の塀と同じく木の薄板で編んだ網代の面が描かれているこの「露台」には、階段がついていて、直方体を立てたようなこの台の上に登ることができる。上面には赤いもうせんが描かれているから、下で草履を脱いで上がるものだろう。これは、全園を見渡すための展望台らしい。網代編みのパネルを四面にして、どうやら必要なときに組み立てられる簡易展望台と思われる。だから、高さはどう高く見積もっても 3〜4 メートルだろう。この程度、高く上れば全園が見渡せるとすれば、やはり浴恩園は、ずいぶん平坦な庭園ということになる。船による回遊と展望台からの見晴ら

[65] 松平定信がつくった庭。現在の東京中央卸売市場のあたり。現存せず。

しにかなう庭園。潮入りの池をもった海辺の大名庭園が、いかに広々とした視界と各所をめぐる回遊を基調にしていたかがうかがえる。[66]

白幡は、露台が展望台として意味をもつのは、庭園が平坦であり、そして俯瞰される視点が盛り込まれたうえで庭園が造られている場合だと指摘した。[67] 庭園内での展望台があることで､庭園に期待されるものが視覚的なものであり、しかも遠くまで見渡せる庭園が生まれたことと関連している。江戸に日本庭園が造られるまで見られなかった俯瞰する視点が庭園の役割として大きく期待されるようになったことを意味している。

(ウェブ公開に伴い削除)

図 12　浴恩園全図

このように露台の存在が明確にわかる資料は浴恩園しか存在しないが、白幡は旧芝離宮恩賜庭園に残された石柱(図 13)が、露台を組み立てる四隅の基礎だったのではないかと主張している。その理由としては「網代編みの板では強

[66] 白幡、前掲書、pp.214-215
[67] 前掲書、p.216

度に欠けるし、風が強かったりすればずいぶん不安定な展望台になるだろう。4本の石柱は、露台が組まれていない場合でもそれほど目立たない。赤いもうせんを敷くような上品な露台は、もともと耐久性に抱える。雨ざらし、日ざらしにするわけにはゆかない。そこで簡易折りたたみ方式が生まれたとも考えられるが、いざ組み立てるとき、その位置を設定し、強度を確保するためには目印となり、強固な石柱が役立った」[68]のではないかと指摘している。つまり、旧芝離宮恩賜庭園の石柱は、露台の基礎部分であり、その上に板やもうせんをかけることで、浴恩園の屏風絵に見られたような露台のかたちになる可能性があるという。

図 13　芝離宮恩賜庭園の石柱

旧芝離宮恩賜庭園でフィールドワークを行ったところ、石柱の説明書きには「この石柱は、小田原北条家に仕えた戦国武将の旧邸から運ばれた門柱です。ここが小田原藩(大久保家)の上屋敷であった当初、茶室の柱に使われていたといわれています」[69]と書かれていた。この背景には、小田原藩の記録が見つかったことがある。東京新聞の 2004 年 10 月 16 日の記事によれば、小田原藩主大久保忠朝のとき、五代将軍綱吉の「お成り」の目玉としてつくられた茶室に「北条氏に唾した元豪族（＝松田家）邸の門柱」が使われた記述があったので、この石柱が茶屋の土台だったことが指摘されている。[70]したがって、白幡の仮説とは異なる事実が明らかになっているが、白幡が何を根拠にしたのか、現在のところ明らかではない。露台が存在した確証があるのは浴恩園のみであるが、

[68] 白幡、前掲書、p.216
[69] 旧芝離宮恩賜庭園の石柱の説明書きより
[70] 東京新聞 2004 年 10 月 16 日「東京ミステリー」

庭園を歩き回ったあとに人々が展望する場所を求めるというのは自然な発想であった。

築山

露台のような展望台の存在がなくても、築山を設けることで俯瞰する視点を取り入れていたと推測される。

> 江戸の回遊式庭園は、敷地に変化のない平坦地につくられたこと、また数万坪に及ぶ広い面積を造園しなければならなかったことから、築山を設けて園景のランドマークとしたり、またその上から園全体をパノラミックに眺められる展望地点としたりしている。駒込の六義園には藤代峠、小石川の後楽園には中国名山の小廬山、浜離宮庭園には富士見山や御亭山、清澄庭園には富士山がそれぞれつくられ、園の内外景観をつないだのである。[71]

海辺につくられた庭園では、築山は人工的な高低差を生む装置として重宝された。旧芝離宮庭園には築山は大山しか存在しないが、浜離宮恩賜庭園には御亭山、樋の口山、新樋の口山、蛇山と数多くの築山がみられる。現在でも浜離宮恩賜庭園の築山を登れば、海や庭園を一望することができる。

[71] 進士、前掲書、p.83

図 14 旧芝離宮恩賜庭園の大山

タイモン・スクリーチ[72]は「回遊は必ずしも順序はないかもしれませんが、庭の中をうろうろすればすべての風景を見ることができて、結局何かの印象が残ります。しかし迷子にはならないのです。庭の中には入れば、歩いて、その後出ようと思えば出られます。後楽園でも幾つかの大名庭園でも高い場所、つまり築山があります。その山の上に登ればすべてが見えます。神様のように眼下にミニ宇宙を見ることができます」[73]と指摘している。このように築山は庭園を一望できる場所として観賞の要所であったといる。

大名庭園に存在した俯瞰する視点

露台や築山による俯瞰する視点は、庭園を一望するという目的を持って登るものであった。これは回遊式庭園ならではの特徴といえる。鑑賞者は露台や築山に登ることで自らの回遊の軌跡を確認することができるからである。江戸時代に庭園を設計するときにその場所が最も園内を一望するために適している場所として選ばれ、俯瞰するために効果的な場所に設置されたと考えられる。こ

[72] タイモン・スクリーチ(1961-)：ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院教授。専門は日本美術史、江戸文化論。
[73] パネルディスカッション「庭園から都市へ」（タイモン・スクリーチの発言）、所収　白幡洋三郎編『庭園の心とかたち』東京農業大学出版会、2001 年、p.71

れは大名屋敷の立地にも共通していると考えられる。大名屋敷は大名たちの生活の場であったが、庭園を俯瞰することも計算されたうえで配置された可能性が高い。

江戸期において、庭園を俯瞰する視点は庭園設計者の意図のもとにつくられ、俯瞰されるものとしての一面をもって意匠を凝らされていたと考えられる。

第二節「俯瞰する視点」と「地上からの視点」

重森三玲の岸和田城

俯瞰されることを前提につくられた日本庭園は実際に存在するのだろうか。特殊な例であるが、現代の作庭家である重森三玲をここで取り上げたい。重森三玲は岸和田城の八陣の庭をはじめ、四天王寺学園庭園や友琳の庭でも俯瞰する視点を導入した。

本論文では、「俯瞰する視点」を先駆的に取り込んだ岸和田城の八陣の庭に注目したい。この庭は「室町以前の城郭平面図をもとに地取し、所々に諸葛孔明の八陣法をテーマに大将を中心に天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇の各陣を配したものである。和歌山県沖の島産の緑泥片岩を用いた石組を京都白川産の白砂で囲み、これに砂紋を描いて海中の蓬莱を表現し、それ以前の庭園にはなかった上空からの俯瞰をも意識した近代感覚あふれた設計となっています」[74]。岸和田城の天守閣は 1827 年に落雷で焼失しており、1953 年に重森三玲が八陣の庭を造った翌年 1954 年天守閣が復元された。[75]

重森三玲は岸和田城の八陣の庭に関して、上空からの観賞を「従来の千何百年来かの日本庭園史上の観賞になかった」[76]と述べている。重森三玲は、作庭

[74] 岸和田城のパンフレットより。
[75] 「岸和田城　いまむかし」岸和田市教育委員会編集、岸和田市観光振興協会発行より。
[76] 重森三玲『日本庭園史大系 29　現代の庭』、社会思想社、1972 年、p.40

家である一方で、日本庭園図鑑を編纂した日本庭園史の第一人者でもあった。こうした重森による指摘を考慮すると、重森以前の「俯瞰する視点」は結果的に「見おろす」と考えられる視点が部分的に存在していたものだといえる。

岸和田城の庭に俯瞰する視点が持ち込まれた理由としては、「永遠という問題を考えるに当って、鑑賞者は、現時点の人々のみの観賞ではなく、永遠の人々の観賞が必要であるから、庭園史の上から、現在までの観賞では不充分であり、行く行くは、天守閣も出来るだろうし、天守閣が再建されることによって天守から俯瞰されることは当然である。俯瞰されるほどなら、いっそのこと、今後の飛行機やヘリコプターの発達する時代となるであろうから、上空からの俯瞰的鑑賞を意図すべき」[77]という考えがあった。重森が飛行機からの俯瞰まで考慮にいれて作庭したことは、突飛な発想に感じられる。しかし岸和田は関西国際空港から近く、フィールドワークをした日も飛行機が上空を飛んでいた。ただし、飛行機から八陣の庭を俯瞰するには、天候や飛行機の向き、さらに飛行高度の点から考えても無理があるので、実現可能な俯瞰する視点は天守閣に限定されるといってよい。

重森三玲はこの庭について「本庭四周を廻遊しつつ一覧出来る外に、三層の天守閣楼上から俯瞰することを設計意図としただけに、是非楼上から俯瞰してほしい。俯瞰することによって、地上の廻遊の時とは全く異なった景観が一覧される。特に午前十時前後か、午後三、四時前後の晴天時は、光線の斜線によって一層美しいことはいうまでもないから、そうした時間を念頭に入れてほしい」[78]と観賞者に希望している。

[77] 重森、前掲書、p.34
[78] 前掲書、p.39-40

2012 年 5 月 3 日、大阪府岸和田市の岸和田城でフィールドワークを行った。その結果、天守閣から俯瞰した庭と、地上から見た庭とは大きく印象が異なることがわかった。

図 15　天守閣から俯瞰する視点

図 16　地上からの視点

俯瞰する視点からでは、全体像が見渡せるという大きなメリットが存在する一方で、視点が天守閣の高さ、そして庭園を臨む一つの側面に固定されてしまう。さらに小さなことは捨象され、個々の石の高さはわからない。対照的に地上からの視点では全体像が捉えづらいという大きなデメリットがある。もし俯

瞰する視点がなければ、重森三玲の意図が完璧に鑑賞者に伝わることはなかった。しかし、地上にいれば、庭園のまわりを歩き回れるので、さまざまな角度から鑑賞可能であり、天守閣からは平面的にとらえていた石の高さがそれぞれ異なることが分かった。さらに白砂に松ぼっくりが落ちているといった小さなことまでわかった。

自由に歩き回れる庭

庭を自由に歩き回れることは、作庭家にとってどのような影響をもたらすのだろうか。重森(1968)は以下のように述べている。

> 庭は地上に描かれた絵画であり、大地に刻んだ彫刻でもある。したがって庭は絵画や彫刻よりも大きい。それだけに、鑑賞の場合も観点が広く大きく、またしたがって自由である。舟遊式の大池庭や、廻遊式の大池庭でなくとも、大仙院のような小庭に至るまで、一ヶ所に座って庭を鑑賞する場合もあるが､庭は動きながら鑑賞する｡一歩動くことによって、実はその庭の構成はまるで異なった様相を出現する。不動のものであるはずの庭が、一歩動いたことによって起こる空間の変化は、いかなる芸術作品にもない大きさをもつ。[79]

したがって、庭園を歩き回ることで得る「地上からの視点」は、空間の変化を起こし、鑑賞者の歩みによってそれぞれ異なるものだといえる。これは作庭家の想定を超えた観賞もありうるということを意味する。それに対して「俯瞰する視点」は、作庭家の意図を直接的に鑑賞者に届けることができる手段である。

[79] 重森、『庭　こころとかたち』1968 年、前掲書、p.201

「地上からの視点」と「俯瞰する視点」の相互補完性

筆者が指摘したいのは、「地上からの視点」と「俯瞰する視点」は相互補完的な視点であることである。これは重森三玲がつくりあげた「俯瞰する視点」に特化した庭園に限らない。前節で既述したように、江戸の回遊式庭園でも庭師は築山や露台を配することで「俯瞰する視点」をつくりあげており、それによって「地上からの視点」ではわからない庭園の姿をとらえることができた。その証拠として、江戸時代には

図 17 のような「御庭絵図」と図 18 のような「御庭図巻」が多く製作されたことを指摘したい。「御庭絵図」とは、「山や谷、池・木々や点在する建物など庭にある具体的な事物を、立体性を無視して、平常では見ることのできない『鳥瞰（俯瞰）』的な視点で描かれている。しかし、この描写によって、我々は図面上の庭園のなかに彷徨うことが出来る。御庭園図は、絵画化された御庭の案内図とも言うべき性格を持っている」[80]という。それに対して、「御庭図巻」は「人が御庭を歩いて眺めるように連続して情景を巻物状に描いた」[81]ものである。

(ウェブ公開に伴い削除)

[80] 徳川美術館、前掲書、p.59
[81] 前掲書、p.59

図 17　戸山名園ノ図

(ウェブ公開に伴い削除)

図 18　戸山荘八景図巻（狩野惟信筆）

つまり、江戸時代の人々は飛行機や高層ビルがなくとも、庭園絵図を見ることによって庭園全体を俯瞰する視点を想像で補っていた。江戸時代から「地上からの視点」と「俯瞰する視点」は庭園を楽しむために相互補完的に使われていたのだろう。

私は回遊式庭園にこそ「俯瞰する視点」が必要だと考えた。人々は庭園を回遊するものの、地上では木や高低差に阻まれて庭の全体像が見えてこない。したがって、庭園を歩き回ったのちに築山にのぼると、やっと庭の全体像を捉えることができる。その眺望の美しさはもちろん、今まで自分が歩いてきた回遊の軌跡を確かめられることによって、はじめて庭園の全貌をとらえることができるのではないだろうか。

第三節　現代東京の高層建築から俯瞰する視点

景観への影響

これまで、現代東京における日本庭園が論じられる際には、日本庭園の背景に大きな高層建築群が映りこんでしまうので、否定的に捉えられることが多かった。

> 東京における都市の環境圧の中では、庭園からの眺望景観の悪化が最大の課題となっている。特に、最近では超高層建築が多く出現し、これらは、立地によっては 2km 以上の距離からも明瞭に認識されるため、その対策は焦眉の課題となっている。
>
> 現在、浜離宮恩賜庭園から 2km の園内には予定もふくめて 35 件の超高層建築が数えられ、小石川後楽園では 3 件の超高層とともにドーム型建築が隣接して視界を遮ってしまった。
>
> さらに最近ではそれらの建築の中で、構造物が見るものに強い圧迫感を与えるといわれる仰角 11 度以上の建築が多くみられるようになった。そのため、日本庭園の景観構成上重要な「縮景」は決定的なダメージを受け、東京の庭園鑑賞者はもはや庭園内で安定した注視点をもつことができない状態である。くわえて、これらの建築に使われる近代的素材（ガラス・金属等）は、庭園との景観的違和感を際立たせている。まさに眺望景観破壊ともいうべき事態が各所で到来している。[82]

[82] 樋渡達也「東京における歴史的名園と都市開発」、所収　白幡洋三郎編『庭園の心とかたち』東京農業大学出版会、2001 年、pp.215-216

樋渡(2001)は、世界名園シンポジウムにおいて、東京都のもつ 8 つの文化財庭園がすべて都市計画上の市街地化区域にあり、現代では高層建築が著しく増加し、眺望景観問題が新たな課題として顕在化していることを指摘した。[83]東京でも庭園に関する景観規制の取り組みは行われている。東京都は 2007 年に「東京都景観計画」の第 3 章第 2 (2)文化財庭園等の眺望の保全に関する景観誘導の項を設けた。この計画は「江戸時代を中心に造られた庭園は、我が国を代表する景観として保存され、今日に伝えられている。この指針は、これらの庭園内からの眺望が保全されるよう、当該庭園の周辺で計画される建築物等の色彩等を適切に誘導することを目的としている」[84]。保全対象として浜離宮恩賜庭園・旧芝離宮恩賜庭園・清澄庭園・新宿御苑・小石川後楽園・六義園・旧岩崎邸庭園・旧古河庭園の都立 9 庭園があげられているが、策定が 2007 年であり、再開発の後追いにすぎない結果となった。

図 19　浜離宮恩賜庭園と高層ビル群

[83] 白幡編、前掲書、p.211
[84] 東京都都市整備局、「東京都景観計画」第 3 章第 2 (2)文化財庭園等の眺望の保全に関する景観誘導、2007 年、p.147、（オンライン）、入手先
http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/kenchiku/keikan/keikaku22.pdf(閲覧日:2012/12/18)

図 20　小石川後楽園と高層ビル群

東京の地価

ただ、高層建築が乱立するのは地価の高い東京では不可避な状態だったことを指摘しておきたい。都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格(2012) のグラフ[85]を示した。都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格が最も高いのは東京都 23 区であり、その価格は 48 万 4,000 円/㎡であった。これは東京についで価格の高いのは大阪市 23 万 1100 円/㎡、横浜市 20 万 4800 円/㎡のほぼ倍の値をとった。

[85] 国土交通省土地・建設産業局地価調査課、“平成 24 年地価公示　都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格”、（オンライン）、入手先 http://tochi.mlit.go.jp/chika/kouji/2012/60.html（閲覧日:2013/01/16）より筆者作成。

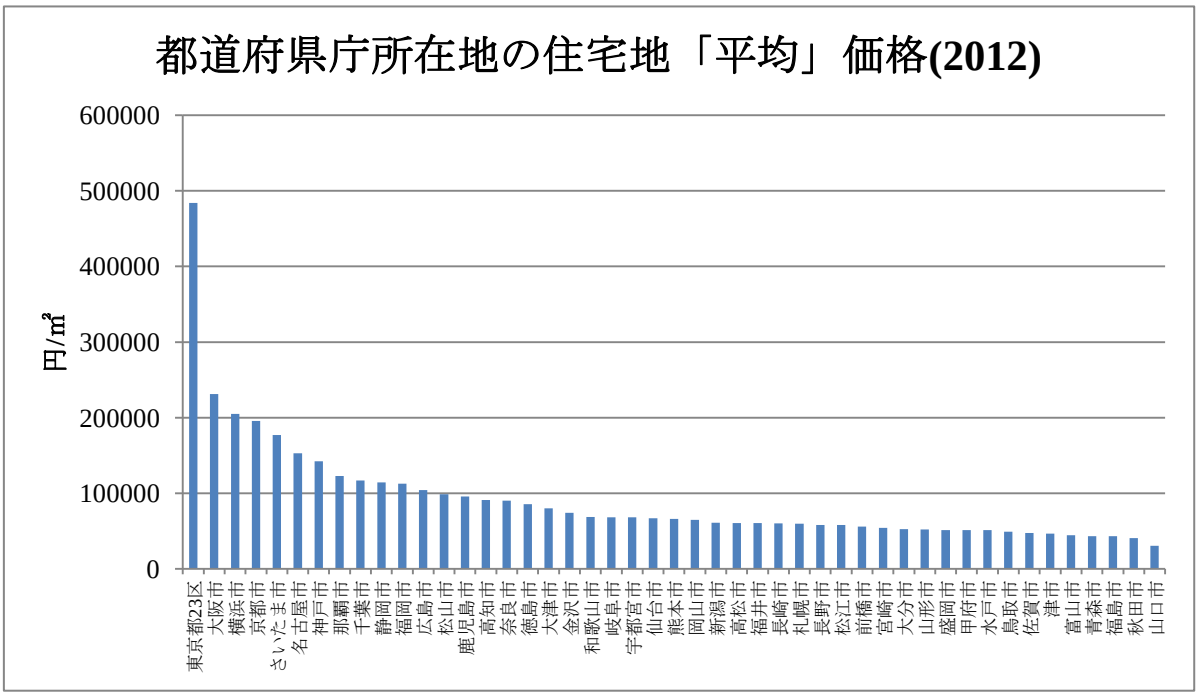

図 21　都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格(2012)

飛田(1985)によれば、「建物を高層化して周辺に緑地を設けることは、都市を整備していく上で有効な手段となる。しかし、居住のためには高層建築は決して好ましいものではない」[86]という。高層化というのは緑地を確保するための手段である。建築基準法第 59 条の 2 で公開空地を設ければ、容積率や高さ制限が緩和されることをふまえて、高層建築と緑地の共存が進んだ。一方で、地価の高い東京において、好立地に位置する日本庭園を保護するためには、その土地分をカバーする容積率をもつ高層建築が必要だった一面もあるのではないかと筆者は考えている。

高層建築と日本庭園の共存

高層建築と日本庭園の共存については賛否両論がある。第一章第三節で取り上げたように再開発によって庭園が復元された場合は、再開発計画に基づいて庭園と高層建築が一体的にデザインされたものなので批判されることはないが、

[86] 飛田範夫『「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985 年、p.202

既存の日本庭園の周囲で再開発が行われた場合には批判されることが多い。したがってこの節では第一章第二節で取り上げた現代東京にみられる江戸時代の日本庭園について注目したい。

浜離宮恩賜庭園に関していえば、「旧操車場跡が開発され、ここ数年で風景が一変した汐留地区に隣接しているので、園内のどこからも競うように並ぶ超高層ビルの百花繚乱を眺めることができ、これも一興といえる」[87]というように浜離宮恩賜庭園と高層建築との共存を肯定的にとらえる論者もいるものの、「現在では汐留再開発による超高層ビル群で前面の景観が台なしになってしまった」[88]と否定的に捉える論者が多い。

従来の高層建築に囲まれた日本庭園に関する考察は、あくまでも鑑賞者が日本庭園内にいる場合を論じているものだ。しかし、現在では高層建築から日本庭園を俯瞰することができる。これは前述した江戸時代の俯瞰する視点や岸和田城の天守閣から俯瞰する視点とは大きく異なるものであり、庭園設計者が意図せざる新しい観賞法だと言えよう。

三者比較

江戸時代の露台と岸和田城の天守閣と現代東京の高層建築からの俯瞰する視点を「高さ」「作庭家の意図」「庭園観賞目的のものか」という 3 つの項目から比較したい。

はじめに高さであるが、江戸時代の露台は 3～4m 程度であり、岸和田城の天守閣であっても 27m 程度[89]である。それに対して、高層建築は 60m 以上もの高さをもち、圧倒的に高い場所から庭園を眺めることになる。

---

[87] 伊藤公文『庭からの視線』アクシス、2006 年、p.95
[88] 進士、前掲書、p.166
[89] 石垣 5m+石垣上端から 22m として算出。

図 22　浜離宮恩賜庭園を臨む高層ビルからの光景

次に「作庭家の意図」ということであるが、これは作庭したときに「俯瞰する視点」を意図して設置して設置したかということである。江戸時代の露台も岸和田城の天守閣も、作庭時に意図した視点であった。[90]つまり、すでに庭園は俯瞰されることをふまえてつくられていた。それに対して、高層建築は庭園ができて約 300 年後に庭園の敷地外に建てられたものであり、江戸時代庭園を造った人々もこのように高所からの視点は想像していなかった。

最後に、これらの装置は庭園観賞目的で造られたものなのだろうか。江戸時代の露台も岸和田城の天守閣[91]も、庭を眺めるために登るものであった。したがって、その本質は展望台といえよう。しかし、高層建築はそうではない。オフィスや住居で、人々の生活の拠点であり、窓から庭園が眺められるにすぎない。もちろん高層建築には展望台をもつものもあるが、それは庭園観賞目的に限られたものではなく、広く東京を眺められるものだった。

以下の表 1 に論点をまとめた。

---

[90] 第三章第一節および第二節参照。
[91] 岸和田城の天守閣は八陣の庭が造営されたのちに復元されたものであり、現在は展望台としての役割を果たしている。

表 1　三者比較

	江戸時代の露台	岸和田城の天守閣	高層建築
高さ	3-4m	27m	60m 以上
作庭家の意図	○	○	×
庭園観賞目的	○	○	△

高層建築が現れる前までは、庭園を俯瞰する視点は庭園観賞目的であり、作庭家の意図の範疇にあった。しかし、高層建築からの俯瞰する視点は庭園観賞が主たる目的ではないものの、鑑賞者が高層建築から庭園を俯瞰すると、今までの俯瞰する視点よりもはるか高みから全体像を捉えることができる。そして、高層建築がオフィスや住宅、あるいはレストランだとしても、誰もが自由に庭を眺めることができることが大きな相違点だと考えられる。

江戸の大名屋敷との比較

現代の高層建築と日本庭園の関係は、江戸期の大名屋敷と日本庭園の関係に近いものだと考えられる。第一章第二節で前述したように大名屋敷は山の手の高台に造られ、庭園を臨むことができるように配置されていたが、あくまでも大名の住まいであり、庭園を観賞するための装置ではなかった。それに対して、露台や築山は社交の場として庭園を楽しむための非日常的な装置だった。

日常生活の合間に屋敷から庭園を眺めることが大名屋敷に住む人々にしか許されない観賞方法であり、庭園が造られたときにすでに生まれていた観賞であった。大名屋敷が失われて、その跡地に高層建築が立ち並ぶ現在、高層建築から庭園を俯瞰することは、本来の日本庭園の観賞方法を根本的に変えてしまったといえるのではないか。もちろん高層建築のどこの階層から日本庭園を俯瞰するのかによって、その庭園の見方は変わってくる。低層ならば借景のようにプライベートな空間として鑑賞できる。また高層では庭園の見取り図を見

るように緑の空間を眺めることができる。いずれにしても本来閉ざされた空間だった大名屋敷の庭園は、開放された空間にならざるを得なくなったといえよう。

高層建築から俯瞰する日本庭園はパブリックなものか？

東京の日本庭園の多くは大名屋敷の一部であり、本来は一部の人々にだけ楽しまれるものであった。それが一般公開されるようになったとしても、塀に囲まれていて、外部からその内部を望むことはできない。しかし、庭園の外部に位置する高層建築はその高さゆえ、自由に庭を眺めることができ、東京の日本庭園はパブリックなものとなったといえよう。もちろん庭園の持ち主側から考えると、はなはだ迷惑な話かもしれないが、このように高層建築から人々に俯瞰されるようになった日本庭園は公園や緑地に近いパブリックな存在といえるのではないだろうか。

佐々木(2001)はプライベートな庭を公的なものと融合させるコモンスペースを提案するなかで、以下のように述べている。

> 近代主義の大きな問題は、パブリックという、視点から都市をつくってきたところに特徴があります。しかし、庭園という原点はプライベートです。もともとプライベートな精神でつくられた空間と、パブリックな精神でつくられた空間とは相いれないということがあります。近代都市の問題はパブリック性を強調する余り、個人個人が精神的にもまちとつながらなくなった。スケール的にも建築が大地とつながらなくなった。超高層の建物が私たち人間のヒューマンスケールを超えてしまった。さまざまな問題をはらんでいます。それを解く基本的な考え方として、パブリックはプライベートの積分である。プライベートを重ね合わせるこ

とによってこそ本質的なパブリックが生まれるという原点に立つべきだと思うのです。[92]

筆者は高層建築から俯瞰された日本庭園はパブリックなものであるが、パブリックのあらわれ方が緑地や公園と異なると考えている。公園や緑地は、近代の都市計画によってつくられたパブリックなものである。それに対して、日本庭園は本来プライベートなものである。そして現在においてもプライベートなものである一面は普遍である。高層建築の階によっても、その庭を眺める時間によっても、鑑賞者によってもその姿は少しずつ異なるものであり、その鑑賞者だけの日本庭園が眺められるからである。高層建築は人々の住まいであり、仕事場であり、遊びに行く場所である。そのなかで過ごす人々がふと外を眺めたときに緑豊かな日本庭園が目に留まるだろう。このように鑑賞者ごとに生まれるプライベートな庭が何層にも重なって、結果として、佐々木の指摘するようにパブリックな存在になっていると言えるのではないか。

図 23　窓から見える浜離宮恩賜庭園

[92] パネルディスカッション「庭園から都市へ」（佐々木葉二の発言）、所収　白幡洋三郎編、前掲書、2001年、p.130

高層建築に囲まれた東京の日本庭園―俯瞰する視点からの考察は可能か―
（岡澤由季）

現代において、東京の日本庭園は従来見られなかったはるかな高みである高層建築から自由に俯瞰されるものである。このようにパブリックなものになりつつある一方で、鑑賞者にとってはプライベートの場所になっていて、実際に庭園を訪れることがなくても憩いの場になっている。今まで庭園はプライベートな存在であったものであるが、プライベートな存在である一面を持ち続けながら、人々に高層建築から眺められて共有された結果、パブリックな空間になった。これは現在の東京の日本庭園にしか見られない特徴だと考える。

結論

東京の日本庭園を俯瞰する視点からの考察は可能か。筆者は本論文において「なぜ高層建築に囲まれた日本庭園が生まれたのか」、「江戸時代に日本庭園が多く造営されたのはなぜか」という前提を明らかにすることによって、日本庭園を俯瞰する視点からの考察を行った。

第一章では、現在の東京において、日本庭園が高層建築に囲まれているという現状を指摘した。なぜ高層建築に囲まれた日本庭園が生まれたのかといえば、東京においては二つの経緯があった。一つ目は江戸から現代まで残された大名や武家屋敷跡の日本庭園のまわりが再開発によって高層化されたことがあげられる。そして、二つ目は再開発に伴って、都市の記憶を遺すために日本庭園が復元される動きがみられたということである。

第二章では、庭園都市江戸をつくりあげた背景に注目した。現在東京に残されている日本庭園は江戸時代には大名屋敷の庭園だったことが多い。筆者は庭園都市江戸が「制度」によって江戸に取り入れられ、京都とは異なる江戸の「地形」を活かすことで新たな庭園を発展させたことを指摘した。さらに大名庭園は「社交の場としての需要」に応える装置として、将軍を接待するだけでなく、臣下や近隣住民をもてなす場となった。したがって、大名庭園は江戸の地に根付いていたということが明らかになった。

最後に第三章では、「東京の日本庭園を俯瞰する視点から考察は可能か」という問題について取り組んだ。江戸時代の大名庭園には既に俯瞰する視点からの観賞が行われていた。また作庭家の重森三玲が俯瞰することを前提に岸和田城

の庭を作庭しているが、作庭家にとっても「俯瞰する視点」と「地上からの視点」は相互補完的なものであり、それを活かすことが庭園を楽しむことにつながった。しかし、現代においては高層建築というこれまでにない高みから日本庭園を俯瞰できるようになった。以前の俯瞰する視点との決定的な違いは、人々が庭園を観賞する目的で高層建築から庭園を眺めるのではない点を指摘したい。その点においては、現在の高層建築と庭園の関係は江戸時代の大名屋敷と庭園に近い性質をもつものだといえよう。そして、人々は窓から庭園を眺め、鑑賞者それぞれが自分の庭を手に入れたように感じることができる。俯瞰する視点は、今まで閉ざされた庭園を誰もが見ることのできるパブリックな存在に変えたといえる。だが、これは公園や緑地のように都市計画に組み込まれた意図的なパブリックではない。本来プライベートなものであるはずの庭が共有されることによって、結果的に東京の日本庭園はパブリックなものになっている。プライベートが重なり合ってパブリックが形成されたのは、高層建築に囲まれた東京の日本庭園の特徴だと考えている。

図注一覧

図 1　旧芝離宮恩賜庭園：筆者撮影(2012 年 11 月)

図 2　小石川後楽園：筆者撮影(2012 年 10 月)

図 3　明治以降の大名屋敷変遷図：陣内秀信『東京の空間人類学』1992 年、ちくま学芸文庫、p.61

図 4　毛利庭園：筆者撮影(2012 年 12 月)

図 5　檜町公園：筆者撮影(2012 年 6 月)

図 6　檜町公園と東京ミッドタウンの敷地境界：筆者撮影(2012 年 6 月)

図 7　小石川後楽園の稲田：筆者撮影(2012 年 10 月)

図 8　大名屋敷分布図：白幡洋三郎「大名庭園」1997 年、講談社メチエ、p.233

図 9　江戸から現代への変遷説明図：皆川典久「東京『スリバチ』散歩」2012 年、洋泉社、p.37

図 10　有栖川宮記念公園の滝：筆者撮影(2012 年 12 月)

図 11　旧芝離宮恩賜庭園の雪見灯籠：筆者撮影(2012 年 11 月)

図 12　浴恩園全図：白幡、前掲書、口絵

図 13　芝離宮恩賜庭園の石柱：筆者撮影(2012 年 6 月)

図 14　旧芝離宮恩賜庭園の大山：筆者撮影(2012 年 11 月)

図 15　天守閣から俯瞰する視点：筆者撮影(2012 年 5 月)

図 16　地上からの視点：筆者撮影(2012 年 5 月)

図 17　戸山名園ノ図：徳川美術館「江戸のワンダーランド大名庭園」2004 年、徳川美術館、p.35

図 18　戸山荘八景図巻（狩野惟信筆）：前掲書、p.32

図 19　浜離宮恩賜庭園と高層ビル群：筆者撮影(2012 年 11 月)

図 20　小石川後楽園と高層ビル群：筆者撮影(2012 年 10 月)

図 21　都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格(2012)：国土交通省土地・建設産業局地価調査課、“平成 24 年地価公示　都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格”、（オンライン）、入手先 http://tochi.mlit.go.jp/chika/kouji/2012/60.html（閲覧日:2013/01/16）より筆者作成

図 22　浜離宮恩賜庭園を臨む高層ビルからの光景：筆者撮影(2012 年 1 月)

図 23　窓から見える浜離宮恩賜庭園：筆者撮影(2012 年 1 月)

参考文献一覧

小野健吉『日本庭園—空間の美の歴史』岩波新書、2009 年

白幡洋三郎『大名庭園』講談社メチエ、1997 年

重森三玲『庭　こころとかたち』社会思想社、1968 年

陣内秀信『東京の空間人類学』ちくま学芸文庫、1992 年

川添登『東京の原風景』日本放送出版協会、1979 年

汐留シオサイト、“街づくりについて”、(オンライン)、

入手先 http://www.sio-site.or.jp/about/about1.html（閲覧日:2013/01/13）

東京都第二区画整備事務所、“汐留地区　2.地区の状況”、(オンライン)、入手先

http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/dainikukaku/chiku/shiodome.html

（閲覧日:2013/01/13）

公園へ行こう HP、“浜離宮恩賜庭園概要”、(オンライン)、入手先

http://www.tokyo-park.or.jp/park/format/outline028.html（閲覧日:2013/01/13）

進士五十八『日本の庭園』中公新書、2005 年

六本木ヒルズ HP、“六本木ヒルズの緑　庭園の歴史年表”　、(オンライン)、

入手先 http://www.roppongihills.com/green/mohri/history.html

（閲覧日:2013/01/01）

六本木ヒルズ HP、“六本木ヒルズの緑　生まれ変わる毛利庭園”、(オンライン)、

入手先 http://www.roppongihills.com/green/mohri/renew.html（閲覧日:2013/01/01）

青山誠『江戸屋敷三〇〇藩　いまむかし』実業之日本社、2008 年

東京ミッドタウン HP、“グリーン＆パーク”　、(オンライン)、入手先

http://www.tokyo-midtown.com/jp/facilities-service/green/index.html
（閲覧日:2012/12/30）

港区立港郷土資料館『東京ミッドタウン前史　赤坂檜町三万年』港区立港郷土資料館発行、2008 年

三井不動産株式会社『東京ミッドタウン』新建築社、2007 年

隈研吾・清野由美『新・都市論 TOKYO』集英社、2008 年

飛田範夫『江戸の庭園』京都大学出版会、2009 年

皆川典久『東京「スリバチ」散歩』洋泉社、2012 年

徳川美術館『江戸のワンダーランド大名庭園』徳川美術館、2004 年

藤本強『埋もれた江戸』平凡社、1990 年

東京新聞 2004 年 10 月 16 日「東京ミステリー」

白幡洋三郎編「庭園の心とかたち」東京農業大学出版会、2001 年

岸和田市教育委員会編集『岸和田城　いまむかし』、岸和田市観光振興協会発行

重森三玲『日本庭園史大系 29　現代の庭』、社会思想社、1972 年

東京都都市整備局、“東京都景観計画”、(オンライン)、入手先
http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/kenchiku/keikan/keikaku22.pdf
(閲覧日:2012/12/18)

国土交通省土地・建設産業局地価調査課、“平成 24 年地価公示　都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格”、(オンライン)、入手先
http://tochi.mlit.go.jp/chika/kouji/2012/60.html（閲覧日:2013/01/16）

飛田範夫『「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985 年

都道府県庁所在地の住宅地「平均」価格

伊藤公文『庭からの視線』アクシス、2006 年

尼崎博正『すぐわかる日本庭園の見かた』東京美術、2009 年

安藤優一郎『観光都市 江戸の誕生』新潮社、2005 年

安藤優一郎『大名庭園を楽しむ』朝日新書、2009 年

安藤優一郎『娯楽都市・江戸の誘惑』PHP 新書、2009 年

伊藤ていじ『建築文化再見 /4　庭ー三つのかたち』淡交社、1982 年

上田篤『庭と日本人』新潮新書、2008 年

材野博司『庭園から都市へ』鹿島出版会、1997 年

重森埶氐『重森三玲モダン枯山水』小学館、2007 年

重森三玲『枯山水』中央公論新社、2008 年

白幡洋三郎『庭園の美・造園の心—ヨーロッパと日本』NHK ライブラリー、2000 年

高山宏ほか『鳥瞰図絵師の眼』INAXo、2001 年

田中正大『日本の庭園』鹿島出版会、1967 年

田中正大『日本の公園』鹿島出版会、1974 年

田中正大『東京の公園と原地系』けやき出版、2005 年

中田勝康『重森三玲　庭園の全貌』学芸出版社、2009 年

(引用文献中の漢数字はアラビア数字に改めている場合があります。)